僕と屋上と真っ黒パンツ

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と屋上と真っ黒パンツ

【Ｎコード】
Ｎ９７１６Ｔ

【作者名】
新兎

【あらすじ】
携帯サイトからお引越し。
屋上で真っ黒パンツと出会ったよって話です。

屋上に繋がるドアには鍵がかかっている。その鍵は、僕が１００均で買ってきたのだけれど。つまり、屋上に立ち入ることが出きるのは僕だけだった――はずだ。

なのに、ダイアル式の鍵は僕が開ける前から誰かの手によって外されており、地面に転がっていた。

やっぱり１００均の鍵じゃ、大して役に立たないか……

そう溜息をつきながら、音を立てないようにそっとドアを開け、屋上を覗き込んでみる。

人がいる気配はない。鍵を外した奴はもうどこかに行ったみたいだ。

ホッと胸を撫で下ろして、屋上へ足を踏み入れる。

僕が好んで寝転がる場所は屋上の中で最も高くなっている、たった今入ってきたドアの上の部分。梯子をつたって上に登っていって――僕は固まった。

僕の視力は悪くない。裸眼で普通に生活できるレベルだ。それにドラッグやアルコールの常習者でもない。だから、視界に映っている光景は、幻なんかじゃないだろう。

屋上の天辺。青いビニルシートを敷いて、こちらに足を向けて眠っている女の子。

っつーか、スカートの中身全開だし。色は黒だ。いや、どうでもいいことだけど。

とりあえず、気づかれないうちにここから退避した方がいいような気がする。このまま黙って真っ黒パンツガン見なんて変態だ。

僕は慌てて梯子からピョンと飛び降りる。だけど、それがいけなかった。

「んー？」

眠たそうな声が頭上から聞こえ、僕は着地した態勢のまま立ち止まってしまった。

「あんた、誰？」

さっきより声が近く感じるのは真っ黒パンツがこちらを見下ろしているからだろう。

僕は緊張に早鐘を打つ胸を押さえながら、逆にたずね返した。

「き、君こそ誰？」

振り返って仰ぎ見た真っ黒パンツは頬杖をついてこっちを見下ろしている。

捲った袖から覗く腕は細くて、だけど、骨ばっているワケじゃなく柔らかそうに見えた。

真っ黒パンツは真っ黒パンツの癖に可愛かった。ちょっとドキッとした。

「あんた、何年？」

僕の胸の高鳴りなど素知らぬ顔でさらに質問返し。僕が答えないと一生質問されてしまいそうだ。時には妥協ってのが必要らしい。

僕は諦めて答えを返す。

「1年」

「1年坊が屋上独占？　生意気ー」

真っ黒パンツは目を細めて笑い「ちなみに私は2年」と僕が質問していないことに答えてくれた。優しい人だ。

「っていうか、屋上は危ないから勝手に使っちゃダメなんだよー？分かる？」

自分のことは棚に上げてよく言う。

「じゃ、じゃあなんで黒――君は使ってるんだよ」

真っ黒パンツのでっかい眼を真っ直ぐ見ながら言った。

真っ黒パンツの目はとても大きくて、それを縁取る長い睫毛もメチャ綺麗で、なんか恥ずかしかったけど、目線を外したら負けた気がするから堪えた。

真っ黒パンツはパチパチと瞬きし、クスリと笑うと立ち上がった。折角、堪えたのに僕は思わず目を逸らす。

だって、目線的に考えて真っ黒パンツがモロ見えになるはずだから。

そうしていると、すぐ近くをなにかが横切ったような風音がして、次いで、トンとそのなにかが着地する音がした。

なにかっていうか上から落ちてくるのは僕より上にあった――上に居た人しかないのだけど。

僕はおずおずと隣を見る。不思議な威圧感を纏った真っ黒パンツがそこに居た。

僕の足と手は少し震えていた。真っ黒パンツが僕の肩を掴んで顔を近づけた。湧き上がる唾液をゴクリと飲み込む。体中から一気に汗が吹き出た。

「それはねー、昔なつかしの不良ってやつだからよ」

耳元でそう言うと、真っ黒パンツは僕の横を通り過ぎて出入り口に向かって歩き出した。真っ黒パンツからは少しツンとしたメンソール系のタバコの匂いがした。

僕はすぐにでも地面に腰を下ろしたい気持ちでいっぱいだった。でも、真っ黒パンツが消えるまで我慢しないといけない。僕は男だから。

硬直したまま立ち尽くしているとガチャっとドアが開いて、閉まる音がした。

僕はホゥッと息を吐いて全身を脱力させた。瞬間、僕の背中越しにもう一度ガチャっという音がした。

「そうそう、私のことは君じゃなく先輩と呼びなさい。オッケー？」

僕はビックリして飛び上がり、そのまま振り返りもせずぶんぶん頷く。満足げな笑い声と共にまたドアが閉まる。

僕は１０秒待ってからドアを振り返った。そこには誰もいない。今度こそ僕は地面に腰を下ろし、そのまま大の字に寝転がった。

自称昔なつかしの不良は、僕にとって初めて出会った不良で、とても可愛かったけれど、やっぱりとても怖かった。

でも、もう一度会いたい気もする。怖いもの見たさってやつだ、多分。

明日、屋上へ行くか行かないか――それは明日決めればいい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9716t/

僕と屋上と真っ黒パンツ

2011年8月12日16時32分発行